

第 152 回 岐 阜 歯 科 学 会 例 会

開催日 平成17年 6 月18日 (土) 午後 1 時より

会 場 朝日大学 1 号館 3 階第 1 大講義室

特 別 講 演

座長 関根 一郎 教授

顎顔面形態に関する 3 次元画像解析

朝日大学歯学部口腔構造機能発育学講座

歯科矯正学分野 北井 則行 教授

近年、高解像度 CT および MRI の著しい進歩により、頭蓋顎顔面領域の硬組織および軟組織形態の 3 次元の特徴を高精度に記録・解析することができるようになった。このような解析方法は、現在のところ、コストが高く利用が限られているが、重度の顎顔面形成異常を有する患者を治療しているほとんどの顎顔面チームは、外科的手術を含む矯正歯科治療の診断・治療計画、治療結果の評価および予後観察のために、CT・MRI を用いた 3 次元形態解析を日常的に行っている。また、顎顔面形成異常を伴い顎顔面領域の一部が障害されている症例の顎顔面形態を 3 次元的に定量解析することは、顎顔面形態が形づくられる過程に、先天的・遺伝的な要素あるいは後天的・機能的な要素がどのように影響しているのかを考察するためにも、重要であると考えられる。顎顔面形態について、CT・MRI を用いた 3 次元画像解析を行うことは、(1) セファロ画像などの 2 次元投影画像では重なって表示される構造物の位置関係を 3 次元的に把握できること、(2) 内部構造の精査が可能であること、(3) 軟組織と硬組織の位置関係を 3 次元または 4 次元的 (含時間軸) に把握できることなどの理由により、臨床で多く応用されるようになった技術である。本講演では、埋伏歯の認められる症例、頭蓋顎顔面に形成異常の認められる症例、顎顔面に関して極端にバランスの悪い成長パターンを有し外科的矯正治療を必要とする症例、なかでも顎の左右非対称症例および骨格性下顎前突症例に対して行った CT を用いた 3 次元画像解析、および顎関節に臨床症状を認める症例に対して MRI を用いて行った顎関節の 4 次元的 (含時間軸) な解析を紹介して、CT・MRI を用いた 3 次元形態解析の有用性について述べる。

一 般 口 演

座長 田村 康夫 教授

1. 朝日大学小児歯科における大臼歯異所萌出への早期対応について

○山田 賢・市橋 豊雄・入江 庸介・西田 宜弘
杉本 勘太・長谷川信乃・田村 康夫

(朝日大学歯学部口腔構造機能発育学講座
小児歯科学分野)

目的

小児歯科臨床において、第三大臼歯の埋伏のみならず第一、第二大臼歯にも埋伏や異所萌出例が見られるようになってきている。この大臼歯の異所萌出は、鉗状咬合、交叉咬合など歯列・咬合異常を惹起する可能性が高く、さらに咬合干渉による顎の偏位、筋緊張の亢進、顎関節症へと移行することがある。それ故、健全な永久歯歯列・咬合を育成する観点から、これら異所萌出に対して早期に対応を行う必要がある。したがって、本小児歯科では臨床的対応として萌出途中の上下顎大臼歯に積極的に働きかけ、萌出方向を変える動的咬合誘導と、第三大臼歯が誘導の妨げと考えられる場合には同歯の早期抜去を行っている。そこで今回、大臼歯異所萌出への早期対応を行い、良好な結果を得た 3 症例について報告する。

症例 1

患 児：12 歳 6 か月 女児

現病歴：本科で定期管理中に下顎左側第二大臼歯の遠心咬頭が先に萌出してきたため、パノラマ X 線により確認した結果、第二大臼歯は近心傾斜し第一大臼歯の遠心下部で半埋伏の状態を呈していた。そのすぐ後方には第三大臼歯が確認された。

処置および経過：第三大臼歯を早期に抜歯して第二大臼歯をアップライトさせる方針で、抜歯窩の治癒を待っていたところ第二大臼歯は自然に萌出を開始し、抜歯後 7 か月目で完全萌出を確認した。

症例 2

患 児：7 歳 5 か月 男児

現病歴：定期管理中に上顎左側第一大臼歯が頬側から萌出し鉗状咬合を呈した。

処置および経過：リングアルアーチの主線からフックを延長させたエクステンショナルリングアルアーチを用